

「雨が降ったら濡れるが勝ちか。アツちゃん、十一歳で開き直ったか。ま、溶けてしまふこともないけど、風邪ひいたら大変や。早う帰ろ、背負うてあげるわ」

篤彦は棒のようになってる足に、引きつるような痛みを感じ始めていた。照れくさいのを我慢して、人目に付かないお荒神さんの裏から表通りに出る坂道の間だけ、好恵の背におわれた。冷たい胸が体温で温もってくる。あの虫はいつの間にか消えていた。

「爺ちゃんが心配しよったけん、すぐ行つといで」

家に着くと好恵はそう言い残し、ぎおんに戻った。篤彦は母屋に急いだ。庭はぬかるみ、縁側も水びたしだった。部屋に吹き込んだ雨で畳の端も濡れている。

「爺ちゃん、ゴメンヨ。心配さして」

「おお、アツ、戻ったか。ただの驟雨じゃ思うとつたが、大降りになるは雷は鳴るはで気がきでならなんだが」

祖父は深い吐息をつきながら、長い間かかってそう言った。篤彦は流されてしまったゴム草履のことは口にできなかつた。

祖父がウトウトしはじめたのを見ると、扇風機の風量を「弱」に切りかえた。

ゼイゼイいう寝息を聞いている内に、篤彦も疲れが出てきて横になった。眠りに引き込まれながら、遠くで鳴る雷の音を聞いた。

夕方、縁側で人の声かして目が覚めた。守とタケシだった。足下にバケツがある。

「アツよ、ちよつとこれ見いや。竜夫はんがくれたんじゃ」

「大雨と雷の中でずーと一緒にあったんぞ」

あの雷雨の及川で動いていた人影は、この二人だったのだ。篤彦は驚き、嬉しか

つたが、自分も川原にいたことは黙っつていようと思つた。

バケツの中をのぞき込むと、鯰が底の縁いっぱいへばりついている。ヌルヌルした背びれにさわるとバシヤリと水音をたてた。

「あつ、この鯰、怪我しとる」

「いさりの傷跡や」

「コイツ、人間でゆーたら何歳くらいじゃろ？」

「及川の底から、オレやの泳ぐのずーと見よつたかも知れんで」

バケツをのぞいて、三人は取り止めない話をした。夕方、鯰はぎおんの調理場に持ちこまれた。

「今日は店も暇やし、私が料理してあげるわ」

好恵は出刃包丁を取り出して頭と尾を切り落とした。

「骨がめっちゃ固いな、けど綺麗な身しとるわ」

手際よく内臓が取り出され、三枚におろされていく鯰を見ながら、タケシと守が感心した。

「アツの母ちゃん、凄いのぉ」

開きにして骨を取りのぞき、切りそろえられた白身に最後に串がうたれた。

「これでよしと。さあ、蒲焼きにしよな。お荒神さんで食べたならええわ。焼けたら持つていってあげるきん待ちより」

三人が裏口を出ようとしたとき、背後で低い声がした。

「お水………、下さい」

ふり向くと、見たことのない女の子が立っている。おかつば髪の毛の澄んだ眼で、同

じ年くらいに見えた。

篤彦たちは、薄暗くなり始めたひろばで、蒲焼きを頬ばりあいながら、今しがた見かけた女の子の噂をしあつた。

その夜遅く、篤彦は高熱を出した。熱の中で、和代から聞いていた話を思い出していた。「夏休みに来るウチの子、名前は葉っぱの子で葉子、五月生まれ……」

香川はん

雷雨の日にひいた風邪が長びき、篤彦はせっかくの夏の日を、家とひろばの間を歩き来するだけで過ぎ去っていた。及川からは相変わらず歓声が響いてきている。

そんなある日、好恵が香川はんからだという伝言を持って帰ってきた。

「月曜日に牛市に行くとき、財田川の土手を通るけに来てみ。ええ牛を見せてやるけに」

香川はんは馬喰をしているぎおんの客で、これまでに何回か会っている。

早朝、篤彦は土手で香川はんを待っていた。

午後になるとにぎわう及川はまだ静かで、青緑色の淵には大小の渦が巻いている。その川面が朝日で輝きはじめるころ、河内橋のたもとに、鳥打ち帽をまぶかにかぶり、牛を引いた香川はんの姿が現れた。

牛の力が強いのか、手綱をもったまま、体を後ろに反らせ バランスを取りながら近づいてくる。左足を引きずるようにして歩くのは、戦争中、南方の島の川で足を洗っているところを鰐に喰いつかれ、踵の骨が砕けたためだと好恵が話していた。そばまで来ると、大きい耳が逆光線に赤く透けて見えた。

「風邪はもうええんか？」

香川はんは、手の先に余っている手綱をクルクルまわし、上機嫌だった。

「牛も土手道だと機嫌よう歩いてくれるわい。オート三輪だの、トラックだの、機械の音は好かんきにお」

時々、ゆるめた綱で「チョッセ、チョッセ」と脇腹を軽く叩き、牛がまっすぐに歩いていくように調子を取っている。脚絆の上でだぼついているズボンが揺れると、腰にぶら下げている刻み煙草のキセルも揺れた。

通り慣れた土手の道を大人の男と歩いているのは、どこか奇妙な気分だった。

篤彦は、はじめて香川はんに会ったときのことを思い出していた。

好恵がぎおんに行きかけたころ、「店に来よるお客の中に好きな人おるん」と、

こわごわ尋ねたことがあった。

「おるで。馬喰の香川はんゆー人や」あまりにもあつげらかんとした答えに調子が外れたが、その時に聞いた市場で馬や牛を売り買いするという仕事と、「裏表がのうて、分け隔てせん人や」という言葉が頭に残っていた。

「いつぞアツにも会わせてあげるわ」

そんな話をした数週間後、好恵に言われたように、お荒神さんのひろばで待っていると、ぎおんの生け垣の間から、浅くろい色の鳥打ち帽の男が現れた。それが香川はんだった。眼光は鋭かったが、左右の下がった目尻がやさしい表情をつくっていた。母に背中を突かれて頭を下げた。

「加藤篤彦です。こんにちわ」

「ワシは香川のオツさんじゃ。あつ坊と呼ぼうかいの」

一人なつつこい話し方につられ、お堂の縁に座って、夏の財田川での泳ぎのことや、祖父から聞いた川の伝説のことや、ぎおんに野菜を届けていることなどを取り止めになく話した。

香川はんの日焼けした腕の血管も、荒れた爪の中も青黒かった。その手の先でキセル煙草をうまさうにくゆらせながら、篤彦の話を「ほーか」を連発しながら聞いていた。

「そうじゃ、ええもんやるわ」帰り際、腹まきから細長い紙袋を取り出した。開けてみると、髪の毛の束のようなものが出てきた。

「人の髪みたいで味わるいよ」

「ワシが気にいっとった馬のたて髪なんじゃ。怪我がもとで死んでしもうたがの手にとってよく見ると、たしかに馬の毛と同じ栗色をしている。長さも二十センチくらいはあるだろう。鼻先に持って行って匂いをかいでいると「嗅いでも、馬糞の匂いもしよらへまいが」と愉快そうに笑った。

「何に使うもん？」「筆なと刷毛なと好きなようにせえや」篤彦はそれを宝にしていたが、あるとき、タケシと守に見せると眼の色を変えて乗り出してきた。

「どこで手に入れたん」「ちょっと触らせや」

二人は、それをてんでに首から背中にかけてお荒神さんのひろばを走ったり、竹の先に結わえて御祓いの真似事したりした。

はじめてあった日にもらった髪は、今でも、大事に引き出しにしまっている。

二年前のことだ。それから話をすることはあったが、今日のように朝早くに、牛を連れだした姿を見るのは初めてだった。

香川はんは、時々、体をかがめ、土手沿いの茂みに腕を伸ばして赤い実のついた小枝を折り取っては、篤彦の方に投げってくる。土手の堤に群生している野いちごだ。

「酸いけんどうマイのう」「うん、ウマイ」

二人は川に向け、種を音をたてて吐き出した。

「あつ坊、この牛、孕んだるんぞ」

「ハラんだる言うて？」

「孕んだる言うんは、腹んなかに子ができとるいうことやないか。めでたい牛なんじゃ」

篤彦は、粘り涎をたらし、喘ぐように歩いている牛の腹のあたりに目をやった。

牛は眼が濡れていてやさしそうだった。まつ毛までである。人間みたいだと思った。

日差しが強まるにつれ、知行寺山の山肌も濃い緑にかわりはじめている。

竹やぶの日陰で足を休めたいと思っていたとき、牛の歩みに乱れが出てきた。藪の下の流れは浅瀬になっていて、せせらぎが土手の上からでも聞こえる。水音を怖じけて歩かなくなった牛を、香川はんは前から巧みに引っ張った。手綱を通された穴が開がり、薄いもも色の鼻の奥が見えた。牛ははげしく鳴いた。

祇園橋のたもとまで来ると、家の前でラジオ体操をやっていた守が、牛と篤彦と

香川はんの姿にキョトンとしている。

「馬のたて髪くれたオッチちゃんや」と言うと、「お早うございます」と丁寧に挨拶をしてついてきた。

「馬喰いうたら、もっとお爺はんかと思うとったけんど、ずーと若いわ」歩きながら小声で話しかけていたがしばらく行くと、タケシと早朝将棋の約束があると引き

返^{かえ}していった。

(以上9月26日放送分)